

れき みん

# となん歴史民だより vol.68

Morioka tonan history and folklore museum

令和3年12月28日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



錦絵「大石内蔵助 市川團十郎」ほか  
 豊原国周 <1835-1900>  
 明治17年(1884) 彫師 弥太 / 版元 福田保

明治17年(1884)に東京の新富座で上演された「天下一忠臣照鏡(てんかいちちゅうしんかがみ)」を題材にした役者絵。豊原国周は長谷川派の豊原周信や初代歌川国貞の門人で、役者絵を得意とした。

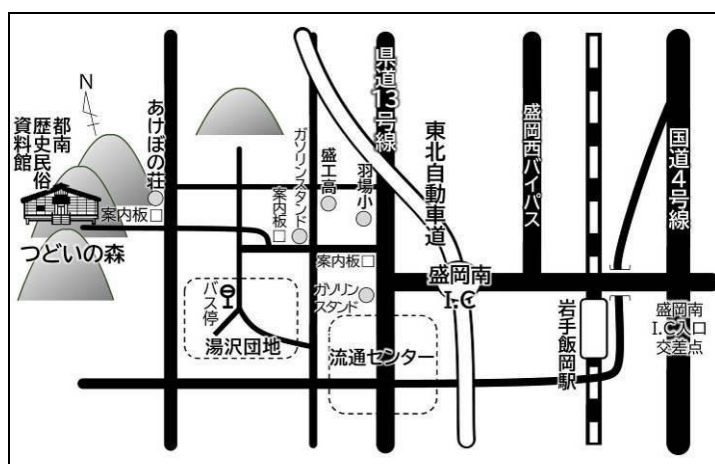
## 是非ご来館ください。お待ちしております。

### — もくじ —

- 遠野街道(盛岡～乙部)  
を歩く～北上川東岸地域の歴史・史跡・文化財について～
- 「となん・かけはしの会」  
活動報告
- 資料は語る(68)
- 盛岡市所在  
指定・登録文化財紹介(68)
- となんの先人⑪

### MAP☆ACCESS

★「都南つどいの森」の案内板を目印にお越しください★



### ○利用案内

#### 開館時間

午前9時から  
午後4時まで

#### 入館料

無料

#### 休館日

月曜日  
(休日に当たるときは、直近の平日)、  
年末年始

# 遠野街道（盛岡～乙部）を歩く

## ～北上川東岸地域の歴史・史跡・文化財について～

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 作山文康

都南公民館主催の地元学講座で『遠野街道（盛岡～乙部）を歩く～北上川東岸地域の歴史・史跡・文化財について』と題して講演を行いました。遠野街道沿いには多くの史跡・文化財がありますが、参加者が興味・関心をもった史跡・文化財について簡単に紹介します。

### ① 瀧源寺のシダレカツラ、門のシダレカツラ

約360年前、大迫町内川目の山中で発見され、岳の妙泉寺境内に移植されました。その後、瀧源寺の住職慶守禅師が、そのヒコバエを瀧源寺境内に移植しました。約200年後、樹高30m余の巨木になったので、天保6年（1835年）、瀧源寺では寺の補修材を兼ねて伐採しました。現存するシダレカツラはそのヒコバエが成長したもので、樹齢約180年です。瀧源寺以外の2株は、そのヒコバエを移植したもので、門のシダレカツラは樹齢約140年、肴町のシダレカツラは約120年で3株とも国指定天然記念物に指定されています。



瀧源寺と門のシダレカツラ

### ② 大泉院

赤沢の正音寺の第五世庵東積和尚が開祖で曹洞宗の寺院です。本尊は、釈迦牟尼仏、寺宝とし極彩色の地獄極楽絵図があります。当国三十三観世音第十一番札所（聖観世音菩薩）となっています。



大泉院

### ③ 手代森遺跡

縄文時代晩期（3000年～2300年前）の遺跡で、多数の竪穴住居跡や土器・石器が発見されました。特に昭和59年の大沢川改修工事では、全国的にも有名な大型の「遮光器土偶」が出土しました。ほぼ完全な形に修復され、平成元年に国の重要文化財に指定されました。



遮光器土偶

### ④ 黒川館、館林神社

斯波氏の家臣・黒川佐衛門の居館と伝えられています。

天正16年（1588年）南部氏の攻略にあい滅びてしまいました。中腹に館林神社があります。館跡の遺構としては、曲輪・帯曲輪・空堀・土塁からなり、高陣山から北西に延びる丘陵先端部に立ち、頂部から階段状に続いています。館跡の西側に建っている館林神社の周辺がかろうじて館跡の面影を偲ばせています。館林神社は、もとは館林観音と称していましたが、明治3年に館林神社と改号し、観音像は手代森の大泉院に移されました。



館林神社

### ⑤ 乙部駅

通称乙部町と称し、遠野街道では盛岡から最初の宿駅でした。また、乙部川と北上川の合流点で北上川水運交通の要地でもありました。乙部町の旧街道沿いや社寺には、江戸時代に建立された数多くの石碑が残っています。



乙部町内の庚申塔

### ⑥ 如法寺

石鳥谷大興寺の末寺で曹洞宗の寺院です。本寺の表参道入口に、一基の餓死供養塔が建っています。宝暦の飢饉の十三回忌にあたる明和5年（1768年）建立のもので、盛岡市指定史跡になっています。



如法寺の餓死供養塔

## ⑦ 乙部館

斯波氏の家臣・乙部兵庫の居館でした。乙部治部義説の代に主家から離反し、南部信直に仕え2100石を賜ります。義説の長子・長蔵は、南部利直に仕え1000石を賜ります。和賀一揆で戦功をあげ、郡山城の普請奉行になり1000人の人夫を預かりました。しかし、人夫の一人が罪を犯したことに怒り、人夫を手打ちにしたことで、録を没収され、切腹を命じられ、乙部氏は断絶しました。館は、天正20年(1592年)に破却されました。この館は、乙部川の断崖に接した台地に築かれた比較的規模の大きい平山城であり、南側を乙部川が流れ、東西に3つの郭に分かれており、それぞれが大きな空堀で区切られています。現在、乙部館跡は宅地や果樹園となっていますが、空堀跡が明瞭に残り、説明板が設けられています。



乙部館の空堀と主郭

## ⑧ 大萱生館と大萱生一族

文治5年(1189年)に源頼朝が奥州平定の際、御家人河村秀清はその軍功によって岩手郡南方の河東と志波郡河東を与えられました。分族で家臣である大萱生氏は、後に斯波氏の家臣となります。しかし、大萱生玄蕃秀重の時、主家から離反し南部信直に仕えます。天正16年(1588年)斯波詮直は南部氏に追われ、山王海に逃れていましたが、後に大萱生家に隠れます。大萱生氏は、旧主をかくまった罪を問われ、攻撃を受け大萱生館は落城しましたが、中野吉兵衛の扱いにより、罪は許され650石を安堵されました。また、岩崎一揆に出陣して功をたてるなど活躍が認められ、子孫は1000石を賜ったり、江戸家老職を務めたりもしました。館は自然の地形を利用し、北館・南館の二つあり、北館には大萱生家の墓所があります。



大萱生一族の墓所

## ⑨ 大萱生金山

明治36年秋田の細川廣吉がこの地に廃坑を発見。同39年に黒沢尻の某操業。大正5年に大阪住友合資会社に採掘権が移りました。昭和になってから住友では精錬所を建て、新技術を取り入れながら操業を開始しました。昭和10年頃から本県の重要鉱山に数えられるほど発展しました。精錬所から矢幅駅間に12kmにおよぶ鉄索が設けられ、鉱石が運搬されました。矢幅駅からは茨木県の日立鉱山へ鉱石を輸送しました。約400人が昼夜三交代で働き、年間に金83kg、銀500kg、その他銅も産出しました。社宅12棟、長屋80棟、共同浴場がありました。商店街には街灯がともされ、桜並木、タクシー会社、映画館もありました。当時、大萱生小学校の児童数は400人を超えていました。昭和17年、戦争のため休山。同19年に廃坑になりました。現在、金山跡の周辺整備が進み、坑道の一つである「万寿坑」が観光用に復元されています。



大萱生金山・万寿坑

## 「となん・かけはしの会」活動報告

### 1 第3回茶話会

「奥州道中を歩く～盛岡から福岡まで」「上ノ橋から四ツ家・花屋町・寺町通」

令和3年10月9日(土)

講師：盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 作山文康

### 2 第4回茶話会

「盛岡藩金山事情 白根金山・朴木金山・小友地区の金山」

令和3年11月13日(土)

講師：となん・かけはしの会 外川靖博会長、渡辺卓哉副会長

### 3 史跡・文化財巡り

「岩手町・一戸町・盛岡市玉山地区の史跡・文化財巡り」

令和3年10月14日(土)

### 4 歴史探訪ウォーキング

「本町・四ツ家町・花屋町・寺町通の寺院」

令和3年9月25日(土)



御堂観音で記念撮影



さしこ しるしばんてん  
【刺子の印半纏】

刺子は厚手の綿布を重ねて一面に細かく刺し縫いする技法で、もとは傷んだ布の補強や防寒のために用いられたが、吸水性と保水性に優れることから防火着にも活用された。火事に際し、火の粉から身を守るため、水をかぶり刺子半纏にたっぷり含ませて消火活動にあたった。

刺子半纏はリバーシブルになっており、消火作業時は地味な面を表にし、鎮火後に裏返し豪快な勇み絵の面を見せつつ凱旋するのが粋とされた。

本資料も上掲の写真の面を裏返すと無地の藍染めとなっている。前身頃に「玉邦画」と画家の署名落款があるが、詳細は不明である。豪壮な武者絵から命がけで火事場に挑む心意気が感じられる資料である。



ぎんぽんこさ おむらさきいとおどしにまいどうくぞく  
銀本小札 紫系緋二枚胴具足

所蔵ならびに写真提供：岩手県立博物館

盛岡藩7代藩主南部利幹<sup>としもと</sup>所用と伝わる具足です。全体を銀粉溜塗とし、いぶし銀のもつ重厚さを表現するとともに、盛岡藩の主要産物となっていた紫根染<sup>しこんぞめ</sup>の緋系<sup>おどしいと</sup>を惜しみなく使うことで調和を取り、落ち着いた雰囲気<sup>まげ</sup>を醸し出しています。

兜は老人の髷<sup>まげ</sup>の形(老頭形<sup>ろうとうなり</sup>)につくり、黒漆塗りの眉庇<sup>まびさし</sup>には皺<sup>しわ</sup>を、腰巻の左右と後ろには岩手山を打ち出しています。

平和な時代において具足は武家の象徴であったため、威容を誇る形態が好まれました。

参考文献：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)  
岩手県立博物館デジタルアーカイブ

### とんの先人⑩ 宮崎 求馬 「後」 / 宮崎 道郎

修験であった宮崎家は代々北野神社(西見前)別当を務めていたが、明治期のはじめに神仏分離政策がとられ修験宗は廃止された。求馬<sup>もとま</sup>も還俗し神職として同社や多数の神社の社掌を務めた。研究により、求馬が社掌を務めた神社は旧都南村や矢巾町を中心に現時点で十五社が確認されている。

大正十四年(一九二五)五月、天皇銀婚式の祝典にあたり篤行者の表彰が行われ、求馬も教育功労者として表彰を受けた。しかし翌月二十四日に病気のため歿した。同年十一月十日には北野神社境内に彰徳碑が建立された。

求馬の長男である宮崎道郎は明治十八年(一八八五)二月二十四日に誕生し、盛岡中学校(現岩手県立盛岡第一高等学校)を経て神宮皇学館(現皇學館大学の前身)を卒業した。東京都内周辺の中学校教員を務めたのち帰郷し、大正十年(一九二一)八月に盛岡八幡宮専任社掌に就任した。同十四年(一九二五)には社司となり県護国神社社司を兼任、同年六月父求馬の逝去に伴い北野神社やその他の神社の社司も兼任した。八幡宮の風致改善の難事業遂行等は高く評価されている。

道郎は郷土史に造詣が深く、民俗学、神祇史、国学にも通じ多くの研究論文を発表した。特に昭和十年頃著した『南部藩勤王思想発達史』は注目された。また、亡父求馬から宮崎文庫を引き継ぎ管理した。

昭和十九年(一九四四)九月二十七日、病氣加療中のところ見前の自宅にて逝去した。

#### 参考文献

都南村誌編集委員会『都南村誌』都南村、一九七四  
岩手県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会『岩手県姓氏歴史人物大辞典』角川書店、一九九八  
盛岡市都南歴史民俗資料館平成二十八年度企画展「都南の先人 宮崎求馬」解説文及び調査資料